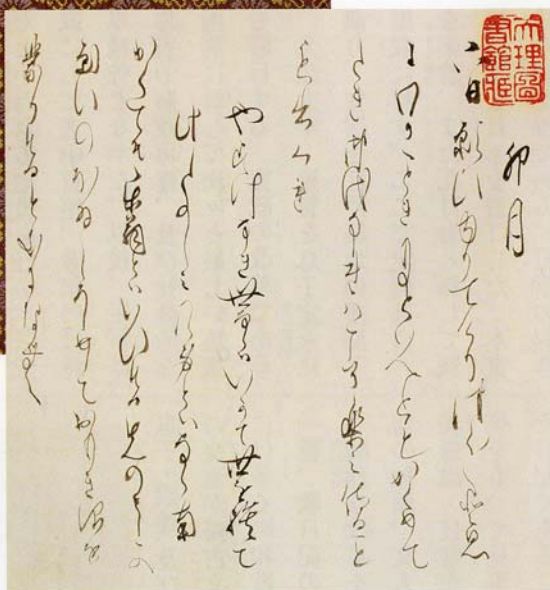
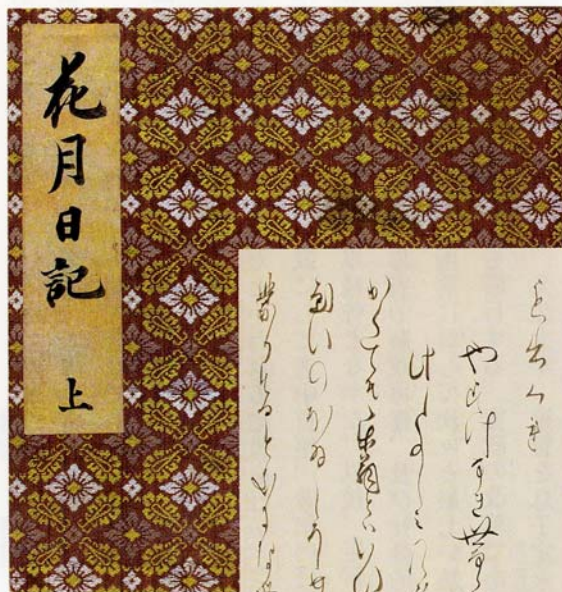


やまとの名品

天理図書館



かげつ につき
花月日記 松平定信自筆

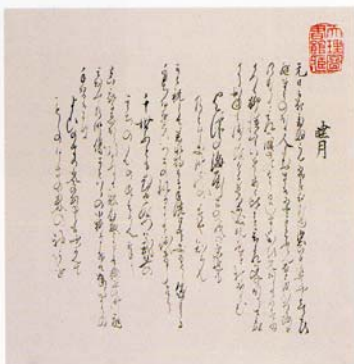
文化9年(1812)～文政11年(1828) 34冊
縦17.3(～18.4)cm 横16.3(～18.3)cm

本書は、若くして江戸幕府老中となった松平定信（一七五八～一八二九）の晩年十七年間に及ぶ自筆日記。文化九年（一八一二）四月六日、白河藩主致仕（退任）の日をもつて書き始められ、以後、死去前年の文政十一年末までの日々が日次に記されている。全三十四冊。毎冊に色とりどりの美しい絹表紙が掛かり、そこには自筆で「花月日記」と記されている。

定信は徳川（田安）宗武の息子、八代将軍吉宗の孫、徳川名門の出自である。しかし、安永三年に白河藩の養子を命じられる。これは、幼少より英明であった定信が將軍候補となること

を恐れた田沼意次らの策動によ

るものとされる。しかし、東北・関東全域に飢饉をもたらしした天明の大飢饉に際し、白河藩のみは一人の餓死者も出さなかつたといわれる治世を行い、三十歳にして老中首座、翌年には將軍補佐となった。以後、定信は、幕府の財政再建、及び社会的な困窮に対して次々と厳しい施策を断行する。寛政の改革である。文化九年、家督を息子定永に譲り、住居を江戸築地の藩邸下屋敷に移す。ここで定信は自らを楽翁、また花月翁と称して風流清雅な日々を過ごした。本書はその記録である。日常の起き臥しと共に、親しい友人、妻、



息子・娘達、及び近臣達との日々の交流が擬古文で記され、合間には多くの和歌が詠み込まれて、一種、歌日記の趣でもある。

峻烈な改革を行った政治家定信の他面、文人としての定信の美意識・日常が、自らの流麗な筆をもつて見事な雅文で綴られた日記である。

（天理図書館 岡寫偉久子）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
 ◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
 1月1日～6日、26・31日は休館。
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）